九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

袁枚の性霊観

西村，秀人

https://doi.org/10.15017/2332644

出版情報：文學研究. 82, pp.93-119, 1985-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

袁枚の性霊観

西村秀人

一、序

袁枚は五十歳の時の詩「九月六日、相公の起程するを送り、路上十首を奉呈す」其の一（詩集巻十九）に、

恩在江南四十年　恩　江南に在ること四十年
山光水色盡纏綿　山光水色尽く纏綿たり
行期偏近重陽日　行期は偏へに重陽の日に近く
剛趁黄花晩節天　剛へに趁ふ黄花晩節の天

と詠じる。袁枚が「恩」の一字を以てその心情を表わす「相公」とは尹継善のことであるが、この尹継善という人は、袁枚が二十四歳の時、二甲五名の好成績を以て進士に及第して翰林院庶吉士に抜擢された際、これに異議をさしはさむ者と力争して袁枚を支持し、また袁枚が二十七歳の時、翰林院を出されて各地の知県の職にあった頃にも何かと目をかけ、特に、袁枚三十三歳の時には、袁枚を高郵の太史に推した人物である。高郵の太史のことは吏部に阻まれて遂に実現せず、袁枚は「萬念都て損除す」（詩集巻七、雑詩八首之其五）と詠じて知県の職を辞し、山居するのであるが、この経過こそ、袁枚の人生観の転換の発端をなすものであり、更には、その後の袁枚の性情を培うものでもあ

ったのである。さて、三十三歳の時、南京郊外の小倉山に隋氏の織造園を得た袁枚は、その翌年「隨園雑興」（詩集巻六）と題して次のように詠む。

（前略）

隨之時義大　隨の時義は大なれば
園名不改卜　園名は卜を改めず
以我今日歡　我が今日の歡を以て
尋公往日樂　公が往日の楽を尋ぬ
逝者如斯夫　逝く者は斯くの如きか
古今同一局　古今は同一の局なり
我後更何人　我れの後更に何人ならん
問山山不告　山に問ふも山は告げず

易経隨卦彖伝の「隨の時義は大なるかな」を引き、更には、「逝く者は斯くの如きか」、また、「我れの後更に何人ならん」と云って自分の運命を卜し、山居に入った袁枚であったが、事実としての袁枚は、三十七歳の時、陝西に知県として再出仕している。しかし後年、袁枚はこの再出仕を悔いて、自分の山居はあくまで三十三歳の時に始まるのであると、頗りに自分の詩に詠みこんでいる。この事は、吏部に阻まれて高郵の太史たり得なかった、換言すれば官僚としての栄達の道を阻まれてしまったと念う、袁枚の怨念ではないかとさえ私には感じられるのである。そのことはともかくとして、袁枚は三十八歳の時、再び山居するにあたって次の詩を作る。

讀書鎮日為書忙　書を読むこと鎮日にして書忙を為すも
別有清眸一寸光　別に清眸一寸の光有り

問我歸心向何處　我に帰心何處に向ふかと問へば
三分周孔二分莊　三分の周孔二分の莊
（詩集巻九、山居絶句）

この詩にみえる「三分の周孔二分の莊」の句にこめた袁枚の意識は、論述をすすめるにつれて明らかにしてゆくつもりであるが、ともかく、袁枚は三十八歳以降終生にわたって山居し、在野の詩人として漸次に声名をはせることになるのである。この経過をふまえた上で、今一度袁枚三十四歳の時の詩と三十八歳の時の詩をみてみよう。先ず、袁枚は三十四歳の時に、次のように詠じる。

（前略）
幽花隨春開　幽花　春に隨ひて開き
好香隨風傳　好香　風に隨ひて伝ふ
有月便歸去　月有れば便ち帰り去り
無雨且盤桓　雨無くば且ち盤桓す
問我飲不飲　我れに飲むか飲まざるかと問へば
存杯聽自然　杯を存して自然に聽ふ
所以主人翁　所以に主人翁は
自號稱隨園　自ら号して隨園と称す
（詩集巻六、十九日梅坡招孟亭南臺再集得觀字）

この詩で袁枚は、自分はこれから自然に隨って自然を行うのだ、その故に隨園と号することにする、と云う。

そして、三十八歳の時には次のように詠じる。

年來心性愛空明　年来　心性は空明を愛し
不弄瓊瑤弄水精　瓊瑤を弄ばずして水精を弄ぶ
自指頭銜堪辟暑　自ら頭銜を指させば暑を辟くるに堪ふ
一條冰上是前生　一條の冰上是れ前生なり

（詩集巻九、消夏詩十二首書扇寄何孝廉其四）

この詩で袁枚は、三十三歳の時の挂冠を強く意識して、「瓊瑤」「頭銜」を前生の性に属するものとし、今後は「空明を愛し」「水精を弄ぶ」ことを以て自らの性にしていくと表明する。官僚としての栄達の望みを絶たれた袁枚の憤懣が、いかに激しいものであったか、また逆に、今後在野の詩人として生きてゆくとする決意が、いかに厳しいものであったかは、この詩に示される「前生」の一語をもってしても、十分に明らかであろう。

それでは、三十八歳以後の袁枚の性はどのように培われ、その感性はどのように鋭ぎすまされ、その性情はどのように表出されて、詩となり詩観となるのであろうか。以下私は、そこに培われる袁枚の性・性情の様態を、主として袁枚の詩集によって追究する。

二、袁枚の心が懐抱する、神秘と不可思議。

後に在野の詩人として「隨園居士」と号した袁枚は、「詩は情に由りて生ずる者なり」（文集巻三十、答戴園論詩書）「詩は各人の性情のみ」（文集巻十七、答施蘭坨論詩書）と論じ、「人は各〻千秋に性情有り」（詩集巻十四、朱詡）と詠じる。このような詩論を展開する以上、袁枚の詩には、袁枚自身の性情が表出されていると断じてさしつかえあるまい。また袁枚は、「夫れ性は體なり、情は用なり」（文集巻二十三、書復性書後）とも云う。それでは、心の体である袁枚自ら

の性には、一体どのようなものが懐抱されているのであろうか。このような観点に立って袁枚の詩をみる時、先ず私の目を惹く特徴的なことがらは、天乃至天に関わる語、或は自然や真宰の語、また偶然、運命、輪回、因縁に関わる語が極めて多いということである。このことは何を意味するのであろうか。以下年齢を追って例詩を挙げ、その意味するところのものを追究する。

袁枚は四十五、六歳の時の詩「自嘲」（詩集巻十六）に、

小眠齋裏苦吟身　小眠斎の裏（うち）　苦吟の身
纔過中年老亦新　纔かに中年を過ぎ　老ひも亦た新たなり
偶戀雲山忘故土　偶こ雲山に恋して故土を忘れ
竟同猿鳥結芳隣　竟に猿鳥と同に芳隣を結ぶ
有官不仕偏尋樂　官有るも仕へずして偏へに楽しみを尋ね
無子為名又買春　子無くして名を為し又春（さけ）を買ふ
自笑匡時好才調　自笑す　時を匡すの好才調
被天強派作詩人　天に強ひて派せられて詩人と作る

と云う。この詩で袁枚は、かつての自分の熱い匡時の志に反して、隠棲の書斎に苦吟する詩人とならざるをえなかった現在の境遇に自嘲する。しかし袁枚は、「官有るも仕へず」というように、すでに辞官或は仕官というその事自体に拘泥しているのではない。そもそも、かかる境遇を招来した発端は、この詩によれば、「偶こ雲山に恋し」た袁枚の心なのである。袁枚が尊崇する孔子は、「鳥獣は共に同群す可からず」（論語微子篇）と明言した。それにもかかわらず、「猿鳥と同に芳隣を結ぶ」に至らしめた、袁枚自身の、自分でも説明のつきかねる混沌とした「偶こ」の心である。そして、この偶々の心に隨い、偏えに詩人として生きることこそは、すでにみたように、袁枚にとって時宜に

かない自然にかなった道だったのであり、更に言を加えれば、それがまた、袁枚の意地ではなかったか。それにしても何故に自分はこうしてひたすら山居の書斎に独り苦吟する詩人であらねばならぬのか、この何かしら遣り切れぬ懐いを袁枚は、天の無理無態だという諧謔を混じえて自嘲しているのである。要するに袁枚はこの詩に、自分でもよく解らないとする自らの心の不可思議さと、ひいてはそれに纏わる運命観をさえも含ませているようである。

また、袁枚は四十七、八歳の時の詩「女は壻の柩を扶けて呉に還る。詩を作りて之を送る」（詩集巻十七）には、次のように詠じている。

柏舟此去雪盈途　柏舟此こを去り　雪途に盈つ
一曲離鸞萬木枯　一曲の離鸞　万木枯る
後會自然來世有　後会は自然来世に有り
佳期怎奈半年無　佳期は怎奈んせん半年無し
好如郎在安眠食　好く郎の在すが如くして眠食に安んじ
莫帶啼痕對舅姑　啼痕を帯びて舅姑に対する莫れ
娣姒成行偏汝獨　娣姒行を成すも偏へに汝独りのみ
未知何處續遺孤　未だ何處に遺孤を続ぐかを知らず

夫に先だたれた我が娘に対し、「後會は自然來世に有り」と思いやる父親袁枚の心情が胸を打つ。ところで、「あの世で会える」というような心情は、意識的な心のはたらきに従う日用平常の場にはそぐわない（経綸の場はいうまでもない）が故に、日頃は表面に現われない、不意の情の吐露であり、それはまた、我々にもよくのみこめる人情ではある。しかしながら、袁枚が用いる自然の語が、基本的に、天地の運行の自然という意味であること（たとえば前出、十九日梅坡招孟亭南臺再集得觀字詩参照）を考えれば、この詩で袁枚が思いをこめた自然観は、いかにも特異であり、不可

思議なものである。これは後に袁枚が、因縁は天に由るものであるから、現世に因があれば来世に縁があるとする思想（後述）につながるものであろうが、私はここで、袁枚がこのような人間の不可思議な不意の情、しかもやむにやまれぬ情というものをとりあげて、それを天地自然に本づけようとすることに注目したい。

尋いで、袁枚は五十一、二歳の時の詩「人の隨園を問ふに答ふ」十七首の其の十七（詩集巻二十）には、

愛將樓閣自家看　　樓閣をば自家看るを愛し
每上山巔獨倚闌　　每に山巔に上りて独り闌に倚る
嘆息天心非草草　　嘆息す　天心は草草に非ず
安排此處老袁安　　排に此處に安んず老袁安

と云う。前述にみたように、隨園隱棲は、袁枚にとっては、自分にも不可解な偶々の心の所為であった。そして、その四十五、六歳の頃の、「天に強ひて派せられて詩人と作る」と云う袁枚は、まだ仕合わせを実感できる境遇にはいなかったのであろう。さて、この詩で袁枚は、その隨園隱棲を客観的にみながら、これを天の草々に非ざる神秘的にも絶妙の安排であるとして、その仕合わせに感嘆する。人情の常であろうか、この頃の袁枚は既に確固たる名声の人であった。因みに、この隨園隱棲は、六十歳の時には、

（前略）

安排歲月歸清福　　排に歲月に安んじて清福に帰し
笑看雲烟過太虛　　雲烟を笑看して太虛に過す
若肯經綸原解事　　肯へて経綸するが若きは原より事を解すも
偶貪花竹竟閒居　　偶こ花竹を貪りて竟に閒居す
年來剩有驕人處　　年来　人に驕る處を剩有す

九十萱堂萬巻書　九十の萱堂　万巻の書

（詩集巻二十四、六十、四首之其二）

と詠じられる。この経過はすなわち、前にみたように、いわば自分の性の転換を図って、自分の人生を山居に賭けた袁枚が、初めはそれを不可思議な偶々の心と詠じ、やがてはそれを神秘的な天の安排と自覚し、更にはその不可思議にして神秘的なものの懐抱を貪欲なまでに培って、それを前生のことであるとした経綸と鋭く対置させ、その緊張関係の中で純ら詩人として生き抜こうとする、袁枚の人生の経過ではあるまいか。

要するに、袁枚は心の不可思議なはたらきと天の神秘的なはたらきとを、自らの人生の已むを得ざるの心情において結びつけているようである。

また、袁枚は六十一、二歳の時の詩「往事に感じて作る有り」（詩集巻二十五）には、次のように云う。

予れ鳳齡の事の為に、今に至るも悒悒たり。因りて己巳の春ト妾せしことを憶ふ。平湖に良家子有り。楊氏は贈るを許すも見ゆるを許さず。事は故に中止す。舟を買ひて歸るに及んで、其の家、余を追ふ。往に見ゆるときは則ち痞作りて行く能はざりしなり。嗣後、或は交臂失し、或は來歸の後、又遣去さる。舛午の膠轕、一にして足らず。大いに仏氏の因縁の説に悟る有り。故に是の詩を作る。

綺麗情懐閲歴身　綺麗なる情懐　閲歴の身
青天碧海漫尋春　青天碧海に漫りに春を尋ぬ
毎看遭際千般幻　毎に遭際千般の幻を看
始信因縁兩字真　始めて因縁の両字の真なるを信ず
花到手時偏不折　花　手に到る時は偏へに折らず
璧從懐後轉生嗔　璧　懐に従ふの後は転こ嗔を生ず

暗中竟有牽絲者　　暗中竟に糸を牽く者有り
笑我徒為傀儡人　　我を笑ひて徒らに傀儡の人と為らしむ

袁枚は六十三歳にしてようやく後継の男子阿遅を得るのであるが、おそらくこの詩は、阿遅を得る前、袁枚六十一、二歳の頃の作であろう。この詩の序に「鳳齢の事」というのは、五十八歳の時に袁枚が、「枯楊の稊と為すを欲せず、為に少年郎を擇びて之に嫁がしむ」（詩集巻二十三、三月六日作序）という娘のことである。因みに、「枯楊の稊」とは、『易』にみえる言葉であり、その「大過」の卦の九二の爻辞には、「枯楊稊を生ず。老夫その女妻を得たり。利あらざるなし」とある。しかし、占いは吉と出たにもかかわらず袁枚は、この鳳齢を手折るにしのびず、鳳齢に自分の子を生ませることを諦めたのである。このようなことがあって、いまだに後継の男子を得ない袁枚は、若かりし三十四歳の頃の卜妾のことを追憶し、もしあの時楊家の子女と結ばれていたら、早に後継の男子を得ていたかもしれないのにという感慨をこめながら、鳳齢のことにしろ楊家の子女のことにしろ、人生における男女遭際の、ままならぬ不可思議さを詠じるのである。因みに袁枚は、「詩は情に由りて生ずる者なり。必ず解く可からざるの情有りて、而る後必ず朽つ可からざるの詩有り。情の最も先んずる所は、男女に如くは莫し」（文集巻三十、答戴園論詩書）と云う。すなわち袁枚は、男女の間の情こそ、後天的な規制に拘束され難い最も先天的な、そして不可解な、しかし人間の真の情であり、そこにこそ不朽の詩は生まれるのだと云う。袁枚のこのような考えは、世間のとかくの批判を受けることにもなるのであるが、六十一、二歳になっていまだに後継の男子のない袁枚の運命観は、切実に厳しいものであったろうことは注意しておいてよいことのように思われる。ともかく、この詩で袁枚は、自分にすら不可解な自己の真情の遭遇する不可思議な運命のありようを嘆じ、竟には、因縁ということに想到して始めて悟るものがあったという。更に加言すれば、袁枚にとってその因縁とは、自己の真情に忠実に隨う人間が遭遇せざるをえない、暗く不可思議な一種運命的な力であったのである。

このことに関わって私が格別に興味を覚えるのは、袁枚六十六歳の時の詩に、「要(かな)らず知るべし、萬事は總て天に由り、半ばは是れ因縁、半ばは福量なるを」（詩集巻二十七、曹子建有感婚賦余倣之作感婚詩寄省堂）とあり、また、六十八歳の時の詩にも、「定めて前縁の在る有り、青天の明月は知る」（詩集巻二十九、寄德中師）と云い、更には、七十歳から七十一歳の時の詩では、「縁の由りて來たる所、其中(そこ)に豈に因無からんや、知る者は其れ天か、板板として偏へにもの言はず」（詩集巻三十一、遣懐雑詩二十四首之其七）と詠んで、因縁を積極的に認めた上で、究極的にはこれを天に帰せしめていることである。

要するに袁枚は、人間の已むなき真情が織りなす人生の文は、常理を以ては律しえない不可思議な一種運命的な力に、如何んともし難く操られて生ずるとし、これをやはり天の神秘的なはたらきに由るものであると意識するのである。

尋いで、袁枚は六十四、五歳の時の詩「紫雪、金鼓諸洞に遊ぶ」（詩集巻二十六）に次のように詠じる。

（前略）

涔涔石乳滴　涔涔として石乳滴ち
蹀蹀仙鼠跳　蹀蹀として仙鼠跳ぶ
古藤高拏空　古藤は高く空を拏み
丹厓低設竈　丹厓は低く竈を設く
穴深不可測　穴深くして測る可からず
誘我往前導　我を誘ひて前に導く
忽然一梁横　忽然として一梁横たわり
故意將人拗　故意に人を拗(くじ)く
喜無元霜侵　元霜の侵す無きを喜び

永辭白日照　永く白日の照を辞す
偉哉真宰心　偉いなるかな真宰の心は
戔戔喜獨造　戔戔として独造を喜ぶ
鬬險乃出奇　険を鬬わせては乃ち奇を出し
因空始見妙　空に因りて始めて妙を見わす
寄語世間人　語を寄す世間の人
頑石猶有竅　頑石すら猶ほ竅有り

真宰の神秘的で偉大な心は、まっ暗な地の底の頑石を、はっとする程に美しい、えも言えぬ自然の造形に昇華せしめる。頑石すら、その真宰の心に感応できるのだから、ましてや人間の心は、より柔らかに鋭敏に感応できる筈ではないか、と袁枚は云う。「真宰」の語に、詩人袁枚は荘子を意識するのであろうが、この詩で袁枚は、上述にみてきたような、個人の孤独な已むなき真情が現わす、人間の心の深く暗い不可思議なはたらきは、たとえそれが常理の光の外にはみ出るものであろうとも、むしろそこにこそ天の心のはたらきに相即する自然があるとして、そうした天人の感応を積極的に主張するようである。

また、袁枚は六十四、五歳の時の詩「京口即事」二首の其の二（詩集巻二十六）に、

方愁三日泊　方に三日の泊を愁ふるに
忽又一帆開　忽ち又一帆開く
任汝聰明極　汝の聡明の極なるに任さん
天心那可猜　天心那ぞ猜る可けんや

と詠む。この詩で袁枚は、三日の足止めを愁わしく思い始めたところへ、突然に舟行によい風を天がもたらして下さ

ったことに対して、その気紛れぶりには些かの諧謔をこめながらも、自分の心の動きを神秘的な洞察力を以て明知した天に、敬意を表するのである。この詩でも袁枚は、自分の心の動きと天の心のはたらきとを感応させる。

また、袁枚は同じく六十四、五歳の時の詩「瓶中の梅に感ず」（詩集巻二十六）に、

戯折紅梅枝　戯れに紅梅の枝を折り
置之磁瓶中　之を磁瓶の中に置く
其時花千樹　其の時　花千樹
欣欣開春風　欣欣として春風に開く
設身為梅想　身を設けて梅と為りて想へば
得無心忡忡　心忡忡たる無きを得
不與衆爭春　衆と春を爭はず
而來伴衰翁　而来衰翁に伴ふ
翁亦慙頭白　翁は亦た頭白の
不稱此花紅　此の花の紅に称はざるを慙ず
因之有薄寵　之に因りて薄寵有り
安放傍簾櫳　安放せられて簾櫳に傍う
一朝天嚴寒　一朝　天厳寒
雪壓兼霜封　雪圧し兼ねて霜封ず
園花盡凋敗　園花尽く凋敗し
細蕊亦疲癃　細蕊も亦た疲癃す

視我瓶中梅　我が瓶中の梅を視るに
精神方隆隆　精神　方に隆隆たり
如以金屋姝　金屋の姝を以て
下視山村農　山村の農を下視するが如し
豈知我折時　豈に知らんや我れ折りし時
並非情所鍾　並(けつ)して情の鍾まる所には非ざるを
偶然興到耳　偶然興到るのみ
採取由奚童　採取は奚童に由る
凡此榮與枯　凡そ此の栄と枯は
豈可常理通　豈に常理の通ず可けんや
一笑語梅花　一笑して梅花に語る
萬事皆天公　万事皆天公なりと

と詠む。この詩で袁枚は、自分の日用平常の場における情によってではなく、偶々起った不意の興にまかせて手折った梅の花が、却ってその為に奇しくも、初めこそ自分の薄寵に遭ったとはいえ、結局は常理を超越した神秘的な天のはたらき、自分に興を到らしめた神妙なる天のはたらきによって隆盛に転じたことを、興味深げに詠じている。ここでも明らかに袁枚は、自分の偶々の心の動きと天の心のはたらきとを感応させているのである。

尋いで、袁枚六十九歳の時の詩「舟、新興の洲に移り、風の覆す所と為る」（詩集巻三十）には、

自嘆七十翁　自ら嘆ず七十翁
遠行原非理　遠行は原より理に非ず

心非利名牽　心は利名の牽くに非ざるも
興從山水起　興は山水より起る
倘作滅頂占　倘し滅頂の占を作すも
亦是偶然耳　亦た是れ偶然なるのみ
風豈有心哉　風豈に心有らんや
未必憐老子　未だ必ずしも老子を憐まず
因之小坎軻　之に因りて小か坎軻し
轉生大歡喜　転生大だ歓喜す
徐徐旨蓄求　徐々に旨蓄は求め
急急衣裳洗　急々に衣裳は洗ふ
記得遼海人　遼海の人は
常行再生禮　常に再生の礼を行ふと記得ゆ

と云う。袁枚は抑えきれぬ衝動に駆られて遠行し、危うく一命をとりとめた。無情の風に吹かれて災難に遭ったのも偶然なら、幸いに一命をとりとめたのも偶然である。またよしんば、その門出にあたってこの旅の吉凶を占い、滅頂という凶の卦を得たとして、それで遠行を思いとどまっていたにしろ、或は敢えて遠行していたにしろ、無情の風は実際に吹いて、舟は転覆したのである。占い通りに災難がおこるのも神秘的にも不可思議な偶然の一致であり、また、いずれにせよ、危うかった一命をとりとめたのも不可思議な偶然なのだと袁枚は云う。敢えて言を加えれば、袁枚は、人間の思議を超えた運命的な力、袁枚自身の言葉でいえば偶然というものによって、人間は左右され操られているのだと云う。また更に、一瞬にして転生したという袁枚の口吻には、そうした人間の不可思議な運命に対する深い

感慨さえも籠められているようである。要するに袁枚は、この偶然の語に、不可思議さと運命観と更には輪回転生観をも籠めているのである。

尚、袁枚は七十二歳から七十五歳頃に、次のような興味深い詩を詠んでいる。

臘盡春歸又見梅　臘尽きれば春帰りて又梅を見る
三才萬象總輪回　三才の萬象は総て輪回なり
人人有死何須諱　人人に死有り何ぞ須く諱むべけんや
都是當初死過來　都て是れ当初より死に過ぎ来るなり

（詩集巻三十二、諸公輓章不至口號四首催之其四）

「三才の萬象は總て輪回なり」とは、袁枚の異様に鋭い感性がとらえる、極めて神秘的にして不可思議な輪回転生観ではあるまいか。ここに私は、袁枚が詩人としての人生を賭けた、心の神秘性不可思議性というものが、その人生でいかに執念深く培われ特異なものに養われてきたかをみることができるように思う。

ところで、私が今迄の論述に引用した、例えば、「隨園雑興」詩と「往事に感じて作る有り」詩には卜の語が、また「舟、新興の洲に移り、風の覆す所と為る」詩には占の語がみえる。袁枚は自分の詩に、しばしば占の語を用い、それ以上に多く卜の語を用いるが、また蓍を取りて筮すと詠む場合もある。卜筮・占筮が不可思議を含むものであり、天地自然と関わるものであることは言うまでもないことであろう。そして、中国を古代に溯って殷周の時代、卜兆を見、その後卜筮に移行する時代の人々が、天地自然の運行のありかたに、神秘性や不可思議性をより強く抱いていたであろうことは想像に難くない。

さて、孔子を尊崇する袁枚の詩には、当然の事ながら、道徳や政治に関わるものも多い。しかし、右にみてきたように、神秘や不可思議に関わる詩は更に多く、就中、天乃至天に関わる語は数えるに勝えぬ程であり、そのはたらき

も極めて多様多彩に詠じられている。そして、それらを総じていえば、袁枚は天地・自然に敬愛の情を抱きながら、その天地自然に温かく包まれているともいえるようである。ともかく私は、少なくとも詩人袁枚の性情には、就中その心の体である性には、彼が三十八歳以降貪欲に執念深く、また漸次に厚く深く培ってきたところの、常理の枠組では促えられない神秘的にして不可思議なはたらきをするものが、究極的に天との関わりによって懐抱されていることを確かめた。そして同時に又私は、人は各々千秋に性情ありとする袁枚が、そのような神秘的にして不可思議なはたらきをするものの懐抱は、万人万様にして多様多彩であるとはいえ、万人の性に普遍のものであるとして、性霊説なる詩文論を展開したのも宜なるかなという共感を覚えた。

三、袁枚の性情観

私が第二章で述べた、袁枚の心が懐抱する神秘と不可思議の様態は、大体において、すでに中国に伝統する、天人感応・天人合一の思想と、その軌を同じくするものである。それでは、袁枚の天人感応思想の特異性は、どのような点にあるのであろうか。このことについて、たとえば第二章の論述の過程にも些かながら含ませてきたように、一つには、天と因縁とを結び、三才の万象は総て輪回なりとするのなどは、確かに袁枚に特異な点に違いあるまい。しかしただ単に、因縁観や輪回観までをも、袁枚がその性にとりこんだという点だけが、袁枚の天人感応思想における格別な特異性であろうか。袁枚の性霊観を追究するに当って、私はこの点に留意しながら、今少しく、袁枚の性情並びにその性情観をほりさげてみることにする。

袁枚は四十歳の時に、次のような詩を詠む。

編得新詩十巻成　　新詩を編み得て十巻成り

自招黄鳥聽歌聲　自ら黄鳥を招きて歌声を聴く
臨池照影私心語　池に臨み影を照らして私かに心語す
不信吾無後世名　吾れに後世の名無きを信ぜずと

（詩集巻十一、編得）

袁枚はこの時点ですでに、自分の性情の詩・性霊の詩は、必ず後世に伝わるものであるという自信を示す。在野の詩人としての執念であろう。

次に、袁枚は四十二歳の時、「偶然作」十三首の其の十三（詩集巻十三）において、

聖人重躬行　聖人は躬行を重んじ
不以道自拘　道を以て自ら拘せず
其治貴清平　其の治は清平を貴び
科條簡且疎　科條は簡にして且つ疎なり
唐虞至商周　唐虞より商周に至るまで
一千年有餘　一千年有余
治民無多談　治民に多談無く
傳心無異趨　伝心して異趨無し
（中略）
瑣瑣角毛鄭　瑣々として毛鄭を角ひ
空空談程朱　空々として程朱を談ず
求之日益嚴　之を求むること日に益ゝ厳しくして

失之日益迂　之を失ふこと日に益ゝ迂なり
未必兩無坐　未だ必ずしも両無に坐せば
果然聖人徒　果然として聖人の徒なるにはあらず
未必兩無外　未だ必ずしも両無の外なれば
都與聖人殊　都て聖人と殊なるにはあらず
聖人不復生　聖人は復た生ぜず
我夢終蘧蘧　我が夢は終に蘧蘧たり

と云う。この詩で袁枚は、太古の、堯舜の世から殷周へ至る時代の様相を慕い、当時は、「道を以て自ら拘せず」「科條は簡にして且つ疏なり」「伝心異趨無し」、と云う。そして、神秘性・不可思議性を豊かに懐抱していた人間の、その自然の性情を、迂闊にも拘束し隠蔽してしまったのが、後代の漢儒や宋儒であり、ひいてはその漢儒や宋儒を遵奉する当今の為政者であるとし、「未だ必ずしも兩無の外なれば、都て聖人と殊なるにはあらず」と云って、清代の中期に生をうけながらも、その自然に隨い自然を行う山居の詩人の自負を詠じる。

また、袁枚は四十四歳の時の詩「陶淵明に飲酒二十首有り。余れ天性飲まず。故に之に反して不飲酒二十首を作る」其の七（詩集巻十五）には、「名教に樂地有り、一たび誤てば殊に曉り難し。英雄と文人は、往往にして佛老に託す。…（中略）…吾れ學びて窺はざる無きも、惟だ二氏の書を憎むのみ。…（中略）…大道に周孔有り、奇兵は莊周より出ず」と云う。この詩で袁枚は、孔子と、孔子の尊崇してやまない周公とを称揚し、また、莊子には敬意を表するも、仏氏と老子の書を憎むと云う。

尋いで袁枚四十五、六歳の時の「再び中丞に贈る」（詩集巻十六）には、「…（前略）…裾を引きて經義を問へば、理を析ちて銖錙を窮む。皇王を相窮竟し、周孔を相攀追す。匡すを畏れて別解を存し、一貫に心期有り。程朱は局促を

慚じ、鄭馬は亦た糠粃なり、と。更に周易の義を談じては、議論尤も恢奇なり。此の大聖の語を道ふは、文王と庖羲となり。六龍以て天に御し、幽贊して靈蓍を生ず。後人相去ること遠く、鳩の天池を窺ふが如し。強いて爻象の義を解すは、乃ち狂痴に非ざる毋し、と。大なるかな先生の言、千年人の知る無し。宣尼五十を過ぎ、方めて敢へて繫辭を作る。所以に雅に三を言ひ、易を以て教垂せず。枚は道を聞くことの晩きを惜しむも、今日良師を得」と詠む。この詩で袁枚は、漢儒や宋儒を罵倒し、孔子・周公を敬慕して、文王・庖羲を大聖と仰いでいる。

右に記した袁枚の三つの詩をみて私が特に興味を覚えるのは、袁枚が自分の思想や詩文観の基盤を、宋儒漢儒を経ずに直ちに孔子周公を溯源した太古の楽地に求めていることであり、また、袁枚の意識においては、この楽地に荘子をも共住せしめていると思えることである。更に言えば、袁枚が、孔子さえも教垂しなかった周易の義を、漢儒や宋儒が義解するとは、まさに狂痴以外の何物でもないと痛罵するのは、天地の自然に隨い天地の自然を行って、自分の性情を培ってゆくとする袁枚の、規格を力排する意識の吐露であると思われることである。そして更に注目すべきことに、袁枚は五十一、二歳の時の詩「除夕、蔣苕生編修の詩を讀み、即ち其の體に倣ひて奉題す」三首の其の二（詩集巻二十）に、「天を仰げば但だ日月の有るを見るのみ、筆を揺かせば便ち古今無きを知る。宣尼は果然韶の樂を用ひ、未だ必ずしも笙鏞の音を敷衍せず。俗儒は磬磬として唐宋を界り、未だ華胥に入らざるに先に夢を作す。…（中略）…只だ詩能く合ふを論ずるのみ、吾が意は吾れ之を取る。優孟も果して能く白雪を歌ひ、滄浪の童子も皆吾が師なり。否らずんば則ち、三百篇中の蠟を嚼む者は、聖人は取ると雖も吾れは知らず。…（後略）…」と云う。すなわち、袁枚にとって、詩はいかなる規格化をも峻拒して、あくまで自己の内なる自然に忠実なる心の声なのであり、たとえ殷周の詩を集めた毛詩三百篇、すなわち詩経の中の詩といえども、それが自己の内なる自然に直ちに響かぬ限りは詩と認めないというのである。また更に袁枚は、八十歳から八十一歳の時の詩「再び招寶山に過り、海を觀る四首」の其の二（詩集巻三十六）の末二句には、「宣尼果して海に浮かばば、怪を語り也た驚疑せん」と詠む。袁枚の詩集によ

って総じていえば、袁枚が最晩年に至るまで孔子を尊崇する人であったことは明らかである。それにもかかわらず、袁枚はその詩文観においては、孔子に全面的に倚依した訳ではなく、時にこのように、独立孤行の意気を示すこともあるのである。そしてこのことは、前章にみたように、「鳥獣は共に同群す可からず」という孔子の言葉にもかかわらず、自分は「猿鳥と芳隣を結」んで詩人として生きざるを得なかったという、山居当初の袁枚の感慨と考え合わせて興味深いものがある。

因みに、袁枚は五十歳の時の詩「老住」（詩集巻十九）に、

老住空山歳月更　空山に老住して歳月更はり
閉思物理最分明　物理を閉思して最も分明なり
青苔避日葵爭日　青苔は日を避け葵は日を爭ふ
同領春風各性情　同に春風を領すも各ゝ性情あり

と云う。この詩で袁枚は、静かに深く各々の物の各々の性情を見究めていくと、各々の物には各々の物の持ち味があることが分明になるという。この青苔と葵の性情は、各々自ら然る性情であり、当然とはいえ、人為の加わりようのない性情であろう。また、袁枚は五十三、四歳の時の詩「苔」（詩集巻二十一）に、

各有心情在　各ゝ心情の在る有り
隨渠愛煖涼　渠に隨ひて煖涼を愛す
青苔問紅葉　青苔　紅葉に問ふ
何物是斜陽　何物か是れ斜陽なると

と云う。この詩で袁枚は、今みた青苔の性情を有心として促えてみせる。この二つの詩を較べてみて面白いのは、袁枚が心情の語と性情の語とを極めて明白に使い分けていることであるが、格別に私の興味を惹くのは、前の詩にみえる

青苔と葵の、自然に隨い自然を行う性情であり、この性情こそが、袁枚自らの性情・性情観に相即するものであるということである。

また、袁枚は五十五、六歳の時の詩「岳水軒焼丹圖」（詩集巻二十二）に、

（前略）

造化未生我　造化未だ我を生ぜざるときは
此權天所操　此の権は天の操る所なり
造化既生我　造化既に我を生ずれば
此身天已交　此の身は天已に交す
君不見　君見ずや
防邑已賜臧武仲　防邑已に臧武仲を賜ひ
據之尚且將君要　之に據りて尚ほ且つ君を要む
何況自家性與命　何ぞ況んや自家の性と命
守之果固誰動搖　之を守れば果して固く誰か動揺せん
勿從去處留　去る處に從ひて留むる勿く
但從來處取　但だ来る處に從ひて取るのみ
能將後天捨　能く後天をば捨てれば
自有先天與　自ら（おのずか）先天の与る有り
水軒先生悟此機　水軒先生此の機を悟り
行年七十如嬰兒　行年七十なるも嬰児の如し

（後略）

と云う。すなわち、人間の内なる自然の性情就中その性は、天に由って生ずるものであり、人間は天地の間に生をうけるにあたって、天の自然のはたらきと通じあう性を個々に先天的に賦与されている、そして天の自然のはたらきに隨い、後天的なものを切り捨てれば、自ずと自らの先天的な性を現わすことができ、そこに個々の自然の命も定まるのだと袁枚は云う。ただここで注意すべきは、この詩にみえる「嬰児」の語に託した袁枚の思いが、単に純粋な本性を保持するものの象徴にとどまらないと思われることである。それはおそらく、そもそも天の神秘的なはたらきを稟けて生まれた嬰児の生性は、欲しいときには貪欲なまでに欲しがり、一瞬表情を変えては何やら喃喃と口を動かす、その生性の自然に隨い自然を行う様相は如何にも不可思議なものを懐抱するが、それはこれから生きてゆかねばならない人間の生のための性を、天性として生得するものであり、このような生性を懐抱し成長してゆけば、人間は天地自然の神秘的なはたらきとよく感応し合える性情を保持してゆけるであろう、ということをより強く意味するのではあるまいか。前述にみたように、袁枚の山居するに際しての、自然に隨い自然を行うのだとする性情は、正にこのような天性の自然に隨い、このような天性の自然を行うということであろう。

また、袁枚は七十歳の時の詩「遣懐雑詩」二十四首の其の九（詩集巻三十一）に次のように詠じている。

宋儒談性理　宋儒は性理を談じ
漢儒談典章　漢儒は典章を談ず
或疑尚書偽　或は尚書の偽を疑ひ
或道周官亡　或は周官の亡を道ふ
聚訟數千年　聚訟すること数千年
長夜無燭光　長夜　燭光無し

我聞沮渠遜　我れ聞く　沮渠遜は
言人浮海洋　人　海洋に浮ぶと言ふと
親見孔聖人　親しく孔聖人を見るに
絃歌聲未央　絃歌　声未だ央きず
七十二弟子　七十二弟子
羅立自成行　羅立して自ら行を成す
何不往詢之　何ぞ往きて之に詢ねざらん
所苦無舟航　苦しむ所は舟航無きなり
傷哉觸觸生　傷ましいかな触触生は
捕影枉自忙　影を捕えて枉らに自ら忙し
雖有記事珠　記事の珠は有ると雖も
不如返魂香　返魂香に如かず

袁枚がその性・性情観の根本に据えたものは、人間が天性として生得する生のための性であった。この詩で袁枚は、漢儒や宋儒の唱導がもたらしたものは、物事の分別を弁えるが如くして、その実、瑣瑣たる徳目に拘泥し、徒らに自らの性命を壅蔽して生命を衰弱させる人間性であり、あの触触生のような人間であるとし、それは死者の霊魂を呼びもどすという返魂香にも及ばないのだと云う。そして、「親しく孔聖人を見るに、絃歌声未だ央きず」として、自らの詩人としての自負を示すのである。

また、袁枚は七十二歳から七十五歳の時の詩「春日偶吟」十三首の其の五（詩集巻三十二）に、

堅冰乍散水生烟　堅冰乍ち散じて水　烟を生じ

小草知春比樹先　小草春を知ること　樹に比べて先んず
荷葉自舒蕉自捲　荷葉は自ら舒び蕉は自ら捲く
性情生就總由天　性情の生就は総て天に由る

と云う。前述の「老住」詩で袁枚は、青苔と葵の、自然に隨い自然を行う性情を詠じていたが、この詩で袁枚は、荷葉や芭蕉の自然に隨い自然を行う性情をとりあげ、しかもそれが天に由る生就、すなわち天生・天然であると云う。これまで縷々述べてきたことからすでに明らかなように、ここにはまた詩人としての人生を貫く袁枚の感慨が籠められているであろう。因みに、同じく七十二歳から七十五歳の時の詩に袁枚は、「三才の萬象は總て輪回なり」（前出）と詠んでいる。三十八歳以降培ってきた袁枚の性情就中その性は、七十二歳から七十五歳の頃には、自然の輪回とでもいうような不可思議なものを懐抱していたように思われる。

以上を要するに、袁枚の懐抱する性情観は、万物の性、就中人間の性は、天の神秘的なはたらきを稟けた不可思議にして多様多彩なものであるからして、漢儒や宋儒のように、徒らに人為的な規範・拘束を設けてこれを壅閼すべきではない、とするものである。更に言を加えれば、かって楽地の人々がそうであったように、天地自然の神秘的にも不可思議な心をこそ自分の心として、折りにふれ事につけては、天地自然と素朴に感応しあえる天性の性情を、豊かに培い保持すべきだ、とするものである。

ところで、袁枚は三十八歳以降終生にわたって、このことを遂行して在野の詩人としての成功を収めたが、一方でその生活は豪奢に流れ、とかくの批判を受けることにもなるのである。袁枚はその最晩年の詩「老いを惡む八首」其の六（詩集巻三十六）で、「昔吾れ少（わか）くして也（ま）た賤なるも、性は却って豪奢を愛す」と詠じるが、天性の自然に隨い天性の自然を行うのだとして生き抜いてきた袁枚の感慨が窺われて興味深い。

四、袁枚の性霊観

袁枚の性霊観は、前章にみたような性情観の中で展開される。

袁枚が自分の詩で初めて性霊の語を用いるのは、六十四、五歳の時の詩「静裏」（詩集巻二十六）においてであり、そこには次のように云う。

靜裡工夫見性靈　　靜裡に工夫すれば性霊見はれ
井無人汲夜泉生　　井に人の汲む無く夜泉生ず
蛛絲一縷分明在　　蛛糸一縷分明に在り
不是閒身看不清　　是れ閒身なるにあらずんば看て清ならず

また、七十二歳から七十五歳の時の詩「花樹の為に蛛絲を撩り、運気の説に感ずる有り」（詩集巻三十二）には、

草木都須氣運扶　　草木は都て気運の扶けを須つも
旁觀只少靜工夫　　旁観するは只だ静の工夫を少くのみ
灰絲蛛網欺蒙處　　灰糸の蛛網欺蒙する處
病樹常多好樹無　　病樹常に多くして好樹無し

と云う。後詩で「静の工夫」とは、具体的には蛛の糸を撩り払うことである。また前詩によれば、その「静の工夫」は、「閒身」にして始めてよくできることのようであり、しかもその「静の工夫」のうちに、自ら「性霊が見われる」。そしてその性霊とは、「井に人の汲む無く夜泉生ず」るがごときものである。このようにみてくると、花樹を蔽ってその生命を欺く蛛の糸は、明らかに、徒らに人を拘束してその天性自然の性情を蔽い生命を欺く漢儒宋儒の徒輩

を指し示すものであろう。そしてまた、袁枚が「静の工夫」と云うことの真の意味は、袁枚がその人生において、前述の三十八歳の時の「消夏詩」で瓊瑶・頭銜を前生の性とし、空明・水精を今後の性としていくのだとした、山居に際しての性情を保持しながら、漢儒や宋儒の蛛の糸のような欺蒙を注意深く撩り除き、あたかも蛛の糸を撩り除かれた花が天然の生気をとりもどすように、人為的な拘束にとらわれない天性自然の性情を、自らの心に豊かに蘇生させ充実させてきた、そのことを云う。それ故にこそ袁枚の懐抱する性霊は、そのような天性の自然に隨い天性の自然を行う性情の中に、ちょうど井戸に夜泉が滾々と湧き出るように、不可思議にも神秘的にも見われ出でて、永遠の命脈を保っているものなのである。然るに多くの人々は、あまたの拘束に縛られて病むばかりで、この神妙不可思議な人間の性情を発露できず、また人生の機にふれ折にふれ、そうした性情というものに積極的に思いを致すこともしない、と袁枚は云う。

また、袁枚は今みた「静裏」詩を作ったのと同じ六十四、五歳の時に、次のような詩を詠んでいる。

千齢會上酒盈巵　千齢会上　酒巵に盈ち
八首吟成絶妙詞　八首吟成す絶妙詞
福壽能兼還有母　福寿能く兼ね還た母有り
性情以外本無詩　性情以外本より詩無し
東山絲竹供陶寫　東山の糸竹は陶写に供し
西浙文章仗主持　西浙の文章は主持に仗る
可惜超超元妙處　惜しむ可し　超超元妙の處
靈犀一點少人知　霊犀の一点　人の知る少し

（詩集巻二十六、寄懐錢琟沙方伯予告歸里四首之其二）

この詩によれば袁枚は、天性の自然に隨う性情を写す詩には、「超超元妙の處、靈犀一點」の通があるとする。加言すれば、天性の自然に隨う性情を持して、天性の自然に隨う性情を写した詩を味わうとき、知らず識らずのうちに靈妙不可思議なる詩心と詩心との疏通がおこるというのである。性靈とは、そのようなはたらきをもするもののようである。

さて、袁枚は七十六歳の時の詩に次のように云う。

但肯尋詩便有詩　但だ肯へて詩を尋ぬるのみにして便ち詩有り
靈犀一點是吾師　靈犀の一点是れ吾が師なり
夕陽芳草尋常物　夕陽芳草は尋常の物なるも
解用都為絶妙詞　解く用ふれば都て絶妙の詞と為る
（詩集巻三十三、遣興二十四首之其七）

すなわちこの詩には、天地自然の万物万象と心の疏通する、性靈詩人袁枚の姿が、袁枚自身によって写し出されているのである。